

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第二主日A年

小西広志

2023年1月15日

朗読箇所

第一朗読 イザヤ書 49章3、5-6節

第二朗読 コリントの信徒への手紙1 1章1-3節

福音朗読 ヨハネによる福音書1章29-34節

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。今日は2023年1月15日、年間第二主日です。

教会の典礼の暦は「季節」と「年間」の二つに大きく分けられます。「季節」では主イエス・キリストの現れ、つまり顕現（けんげん）をお祝いします。すなわち、待降節、降誕節、四旬節、主の過越の聖なる三日間、そして復活節がその期間となります。「年間」では主イエス・キリストがどういった方なのか、主の生涯と宣教の出来事がお祝いされます。「年間」は先週の「主の洗礼」の翌日から始まり、およそ九週間続きます。その後、四旬節と主の過越の三日間、復活節を挟んで、「聖霊降臨」の主日の翌日から「王であるキリスト」の週まで続きます。年間第二主日の福音は、主日の朗読配分がA年であれB年であれC年であれ、必ず『ヨハネによる福音書』からの一節が読まれます。それは、降誕節で示された救い主キリストがどなたであるのかをその場に居合わせた人の「証し」によって明らかにするという意図があります。今日の朗読では洗礼者ヨハネがあかしをします

あじわいのポイント

第一朗読は『イザヤ書』からです。主の僕であるイザヤ（第二イザヤ）の使命は、帰還したイスラエルの民を神さまのもとに帰らせ、しかも「わたしの救いを地の果てまで、もたらす」（6節 新共同訳）というものです。それは壮大な使命です。そのために神さまは「口を鋭い剣として」（2節）彼に与えました。彼は口という武器を使って神のことばを語りますが、語っても人々に聞き入れてもらえず、「うつろに、空しく、力を使い果た」（4節）すという徒労感にさいなまれます。それでも主は「母の胎にあったわたしを御自分の僕として形づくられた」（5節）と、決意も新たに使命を果たそうとします。

第二朗読は『コリントの信徒への手紙 1』の冒頭からです。かつては「教会」を迫害したパウロは（1 コリ 15 章 9 節参照）、今は「神の教会」（2 節）へあいさつを送ります。「キリスト・イエスによって聖なる者とされた」（2 節）パウロが、同じように「召されて聖なる者とされた」（2 節）コリントの教会の人々と共に、「恵みと平和」（3 節）をいただいていることを確認するためです。

福音朗読にある「証しする」（32、34 節）に注目してください。もともとは証言するという意味がある「証しする」（マルティゾー）に囲まれた 32-34 節で、洗礼者ヨハネは、霊が天から降ってイエスさまの上にとどまるのを見たという体験と、彼に水で洗礼を授けるようにと促した「神のことば」から、確信をもってイエスさまが「神の子」（34 節）であると言い切ります。洗礼者ヨハネはあらかじめイエスさまを「知らなかった」（31、33 節）でしょう。しかし、彼を遣わした方のことば（33 節）のおかげでイエスさまを「知る」のです。『ヨハネによる福音書』では「知る」とは単に知識で知るという意味だけではなく、イエスさまとの関わりに入るという意味が込められています。洗礼者ヨハネは、自分の体験から始めて、神のことばに導かれて、イエスさまが「神の子」であることを信じます。体験と神のことばに支えられてイエスさまへの信仰が生まれるのです。

まとめ

まとめとして、今申し上げました「証しする」についてあれこれ考えてみましょう。「証しする」は「証言する」に言い換えてもよいでしょう。羊飼いたちは天使たちの声「今日、あなたがたのために救い主が生まれた」（ルカ 2 章 10 節参照）という証し（証言）を聞いて、イエスさまのもとへと出かけて行きます。そして、幼子を見て、このことを人々に証し（証言）します（2 章 17 節参照）。聖書は神さまについて、イエスさまについての証し（証言）で満ちています。人は聖書の言葉を聞いて、つまり、証し（証言）を聞いて信仰の道へと入っていきます。イエスさまご自身が御父のお姿と思いを人々に証し（証言）なさった方です。

信仰の証しを聞いた人は、同じように自分の中に生じた信仰の出来事を証しします。証言します。教会の共同体は、それぞれの人の信仰についての証言でつながっています。「ああ、あの方の信仰はすばらしい」と驚くとき、わたしたちのいのちは躍動していきます。

新成人の若者たちは晴れ着やパリッとしたスーツ姿で自分たちの存在を証し（証言）します。若い人は、その存在で証し（証言）できます。では、わたしたちは何で自分のいのちと自分の信仰を証しできるのでしょうか。時々、考え込んでしまいます。

自分のいのちを証しするとは、自分を示すことではないように思うのです。逆に誰かの証しに耳を傾けて、いのちを燃やして、感動します。そして、他の人に今度は自分の言葉、自分の存在で証しをし始めるのです。証しは「聞く」ことから始まるのではないのでしょうか。教会にやってくる若い人たち、子どもたちの生きる姿、言葉に耳を傾けましょう。こうして、わたしたちは証し人になれるのです。

それではまた来週。